

シンハラ社会における宗教文化

神谷 信明
(名古屋大学)

はじめに

われわれがある宗教を知ろうとする場合、およそ二つの態度を取ることができる。

一つは宗教を自分自身の信仰対象として主体的に捉えようとするいわば自己の信仰上の位置づけから捉えようとする態度である。

一方宗教を一つの文化現象として客観的に捉えようとする態度である。つまり宗教を価値中立的な立場から科学的に捉えようとする立場である。この場合宗教のどの部分に関心をもつかによって、さまざまな研究分野が生まれる。たとえば日本における仏教研究について見てみると、従来はその多くが教理と思想的発展の研究が中心であった。

しかし最近では仏教の行われた時代、地域の自然環境、社会環境、あるいは外来文化との接触、文化摩擦、文化融合など、外的要因との関係において仏教を研究する人々もいる。また仏教学者とはまったく違った角度から仏教研究に取り組んでいるのは、文化人類学者、社会学者、それに一部の政治学者である。

このようにこれからの仏教研究は、仏教教理の研究だけでなく、民俗宗教を包括している現実に生活化された広い意味の仏教研究も必要になって

来る。そのために仏教研究は単に仏教学者のみならず宗教学者、人類学者、民俗学者などの幅広い連携が益々必要になってくるのではないかと考えられる。

そのような観点から私たちプロジェクトチームは各専門分野の研究者を交えて、これまで5回にわたってスリランカの現地調査を行い、それによって明らかにされたスリランカ仏教の実態を以下に明らかにしたいと思う。

そのためにスリランカの仏教について、まず出家者の仏教と在家者の仏教の実態について報告する。

出家者の仏教について

現在スリランカには出家者を中心とする上座仏教が国教に準じた地位を与えられ大きな影響力を持っている。この仏教は単に僧伽だけの繁栄だけでなく、それを支えている一般民衆の仏教が存在し、それが民衆の生活の隅々にまで浸透し、大きな社会的価値を保っている。そしてこれら出家者の仏教と民衆の信じている仏教が整合性を失わず、一つの「スリランカ仏教」として存在し、双方が共に異なった原理に基づいた二重構造を保ちながら発展している。しかるにその二つの異なった原理がどこにあり、どのように組み合わさって一つの斉合性をなしているのか、それを明らかにしようとするのが以下の報告である。

これまでなされてきた従来の文献学的上座仏教研究の多くは、出家者の教理の研究が中心であって、民衆の仏教研究は少なかった。生きた現代の仏教を探るためには民衆の側の研究も必要になって来る。今回の報告はこうした視点にたって、出家者の仏教と民衆の仏教という、いわばエリートのための仏教とマスのための仏教の信仰体系の実態を明らかにしてみたい。

上座仏教の教えは出家して、全生活をそれにかけてなければ十分な実践が

できない。その意味で仏陀の教えは能力があり、しかも出家できる立場にあるエリートを対象にしたものである。しかしそれだけでは仏教の持続発展はありえず、僧伽を支える民衆の支持がなければ成立しない。

スリランカの仏教ははじめは王室の庇護のもとに国家的援助を受けて発展してきた。スリランカへの仏教伝来は、アショーカ王の子・マヒンダ長老であり、彼の教えを聞いてその最初の帰依者となったのが、スリランカの王のデーヴァナーンピヤ・テイッサであった。その後この王とその後継者たちの保護のもとにスリランカは上座仏教のメッカとして発展してきたのである。このようにスリランカ上座仏教はまず王権の中にその支持を得、出家教団は王室の庇護のもとに、確固たる物質的基礎を与えられた。この基礎を背景に、出家者中心の上座仏教は徐々に民衆の中に浸透し、社会生活のすみずみに大きな影響力を与える勢力へと成長し、今日にいたっている。

ところで現在スリランカには3万8000人程の僧侶が住んでいるといわれる。

そのうち「寺院所住」の僧侶と「森林所住」の僧侶がいるが、大半は前者の僧侶が圧倒的に多い。「出家者」の生活は「在家信者」の「施食」によって支えられ、「施食」することは「在家者」の義務であり功徳を積む行為とみなされ、ここには出家者優先の原則が社会的に確立されているということである。それに応える意味で出家者は厳しい戒律を守って世俗生活を離れ、解脱・涅槃の目標に向かって生きているのである。それ故に出家者に対し、在家者からの尊敬を得ているのである。

出家者はかつては遊行者として各地を遍歴する生活をそのあるべき姿だとしていた。しかし教団が発展するにともなって、在家者から修行のための用地の寄進を受け、そこに所住し宗教的生活共同体が結成され、ここに

僧伽が生まれてきた。そして僧伽は出家者の修行目的の効率的達成を目標として結成されたところの機能集団となった。出家者はこの僧伽に所属することによって、確実な生活の保証が与えられるのである。それによって僧伽の中の出家者は世俗界の存在を顧慮することなく、修行に全力を尽くすことができる。世俗界の幸福と無縁な徹底した個人主義が称賛される社会である。ポーヤデー毎に剃髪する出家者は自分が一般社会から隔絶された超俗的存在であることを自覚する。しかしこの超俗性とは一般社会から隔離された人里離れたところに居を構えているというのではない。一般の社会生活からの絶縁ということが重要な点である。しかし一方では僧伽は一般社会の中に存在していなければならない。戒律によって生産活動を禁じられている出家者は、在家者による布施がなければ生存することはできないからである。出家者による在家者への法施は、在家者の出家者への布施と完全な等価変換関係によって成り立っているからである。

さらに出家者は僧伽に所属していることによって、法の伝承という重要な機能がある。すなわち仏陀の教えは師資相承のうちに伝承されて今日にいたっている。僧伽ではひたすら持続性、無変化性が追求され、伝統に変化をもたらす要素は極力排除され極めて保守性を保っている。このために大乘仏教にみられるような多彩な教理の展開は見られない。このように僧伽が仏陀の教説の忠実な伝承者としての維持集団として機能すればするほど、僧伽の仏教的価値は高まり、在家者は僧伽に触れ儀式に参加することによって、仏教を感得し、自己の宗教的行為の正当性を確認できるのである。

このように僧伽中心主義の仏教が今日まで衰退することなく生きながらえたのは、一方でこの僧伽主義を補完し、それを支えてきた在家者のための仏教が、在家者達の中にきわめて広くかつ深く根を下ろしているからに

他ならない。そこで次に在家者における仏教の構造とその実践の姿を考えてみたいと思う。

在家者の仏教

上座仏教は、出家者と在家者という全く構成原理の異なる二つの信仰者群によって支えられている。前者は227の戒律を守り解脱という目的達成のために僧伽という機能集団を組織している。

これに対して在家者は僧伽の中に仏教を見いだし、僧伽を仏教の拠りどころと考える。在家者の行う功德は、僧伽を支え、僧伽に供養し、僧伽に奉仕することの中に喜びを見いだす。僧伽の繁栄に貢献することは、最もすぐれた功德の行為であり、それは最大の善果を約束する行為に他ならないからである。具体的には寺院の建立、自己の出家、息子の出家、僧侶への布施、仏陀への供養、五戒の遵守などいずれも実践によるものであり、僧伽の維持にかかわることが多数を占める。

このように仏教は在家者の間で精神的支柱として定着し、民族のアイデンティティの源泉となっている。

仏教と在家者とのつながりは、寺院活動を中心に展開するが、僧侶は日々の生活の中では知的エリートとして在家者の相談相手となって在家者に対する指導的役割を果たしている。さらにまた葬儀においては、現世と来世の接点に立つものとして、功德を死者に回向して、よりよき再生を願う在家者の期待に応えようとしている。

ピリット儀礼

とりわけ重要な機能を果たしているのは、ピリット儀礼という仏教儀礼である。この儀礼の存在はスリランカ仏教社会にあって、仏教と社会との

相互性を最も象徴的に示しているものと考えられる。聖と俗、僧伽と一般社会、僧集団と俗集団、教理と現実、仏陀と個人、宗教と呪術などの関係がはっきり映し出されてくる。仏教は霊的存在を認めず、超自然力や神々に対する祈願を行わないのが本来の在り方である。にもかかわらず仏教が土着化するにつれて、こうした儀礼は避けがたく、むしろ儀礼を通じて仏教は在家者の中に深く溶け込んでいったものと考えられる。

ピリット儀礼の目的は大きく三つあると考えられる。第一には仏教徒としてのアイデンティティの確認。すなわちピリット儀礼を行うことが、仏教徒としての証であること。第二は呪術的效果をもたらすものであること。これを行うことによって諸々の悪霊から人々を守ってくれるものであること。第三に社会関係の確認である。これを行うときには、できるだけ多くの人を招き、社会的に開かれたものにするのである。これによって多くの人々との強い結合関係が結ばれるものと考えられる。

ピリットとは護呪經典のことであって幸福を獲得し、無病息災から身を守る目的で朗唱され、呪術的效果を持つとされる。ピリット儀礼の種類には、ワル・ピリット (varu pirit 時分ピリット)、徹夜ピリット (sarvarātrika pirit 僧侶は8人以上16人が標準)、七日ピリット (baṇa pirit 7日・1カ月など長時間続くピリット儀礼で僧侶は24人以上) がある。

たとえばワル・ピリットはピリットの中でも最も短い儀礼で、僧侶は3人以上(2人も可) 1時間位のピリットを3回に分けて行うもので、朝に始まってその日の晩と翌日の朝、あるいは晩に始まって翌日の朝と晩の3回行われる。そして経済的に余裕のある人は、それより長い徹夜ピリットまたは七日ピリットが行われる。

ワル・ピリット以上の徹夜ピリットになると儀礼は、家庭・寺院など特定の場所を問わず「囲い・仮堂」を作ってその中で行われる。一般には8

角形の仮堂が多い。入り口は吉祥の方角である東あるいは北に設定される。仮堂の中には白布で覆われた机と僧侶の人数分の椅子が用意される。儀礼物としては、「ピリット紐・糸」と「ピリット聖水壺」が不可欠の物とされる。この壺から「ピリット糸」(pirit-nula)がはられ、「舎利器」を経て、僧侶の手でまわされる「ピリット紐」に結ばれるとともに、さらに仮堂の外の参加者にも結ばれる。糸と水は呪力を持つものと考えられ、儀礼終了後に参列者一人ひとりに与えられる。

このような儀礼は在家信者の家で行われる場合には、私的で定期的なケースとして病気治療、健康祈願、安産祈願、追善供養、また私的で臨時的なケースとして店の開業、新築、移転、改修、海外渡航の安全祈願など、また公的なケースとして学校・病院の開設、水害、飢饉・疫病の見舞など、また宗教的なケースとして寺院諸堂の建立、改修、仏像の開眼供養、僧侶の得度式、具足戒の儀式、満月の聖日、さらに政治的なケースとして国家の安全祈願、国会の開会、国家的行事、独立記念日、要人の外遊や歓迎などにもピリットが読まれる。

このようにピリットには人生儀礼に伴う定期的なものや臨時的なものがある。公的あるいは宗教的な行事は祝福のためとともに、場合によっては募金集めが重要な場合がある。さらにまた人生上の危機的状況とか祝福すべき時、あるいは年中行事に際しても行われている。

ピリット経典は「大吉祥経 (Mahāmaṅgalasutta)」「宝経 (Ratana-sutta)」「慈経 (Karaṇīya-mettasutta)」などである。「大吉祥経」は最上の吉祥とは何かを問うた天神に対する釈尊の答えが述べられている。また「宝経」は鬼神に対して人類に慈悲をなすことを要請し、特に三宝の意義を説いている。さらに「慈経」は世界のすべての存在に慈愛・福祉を与えよと説いている。以上の3経がいわゆる「大ピリット (maha-pirit)」の中

心となる三部経である。このようにそれぞれ、「倫理」「三宝」「慈悲」を強調する3経によって三部経が構成されている。しかし在家者にとってこれらの經典のパーリ語理解はできず、一種の呪文として受け取られている。しかし彼らにとっては仏教教理の現世否定的で観念的な側面よりも、具体的な事物を使って僧侶に体现化された現世肯定的な呪術的效果が大事なのである。基本的には日本の仏事法要とほぼ同じであるが、儀礼そのものが日本の場合と違って、極めて生々しく、現在の生活と結びついていることである。死者への功德の回向から、現世利益的な欲望と祈願、さらに社会関係まで応用されていることにある。スリランカの僧侶の生活を見れば、僧侶の大半を占めるのは何らかの形でこうした儀礼の執行者となっていることである。人生上の通過儀礼においてこうした仏教儀礼を必要とし、またそれから切り離されることはない。しかし仏教の教義上の立場からすればこうした仏教儀礼は否定され、その存在形態は常に矛盾をはらんでいる。しかしこの矛盾ないし二律背反性は、信仰の枠組みの中で決して対立し葛藤しあうものとなっていない。むしろ両者は仏教が根をおろした各々の文化と融合し、スリランカ仏教文化を形成している。

さらにまたこうして民衆にピリット儀礼が受け入れられている理由は、ヒンドゥー的な神観念や民間信仰の要素を再解釈して仏教化し、民衆仏教としているという点が重要である。次にそれを明らかにするために儀礼行為に関わる神々や霊的存在、悪霊などを民衆が仏教的世界観のなかでどのように取り入れていったかを明らかにしたい。

神々の信仰

シンハラ人は、仏陀を歴史上の人間と見て追憶的に敬慕しているのに対して、現世の事柄は神々がその役割を持つ。人々は神々に祈り、供物を捧

げて願いを乞う。仏陀と神々との関係は、仏陀はヒエラルキーの頂点に位置づけられた超越的存在であり、神々はその仏陀の権威の移譲を受けて、現世での民衆の願いに応え、機能を果たすと見なされている。神々は寺院の境内に併設されたデーワレ（神祠）に祀られているケースが多い。人々は仏陀に参拝したあと、このデーワレに行き、カプラーラ（祭司）に祈願してもらう。これは仏陀に参拝して得られた功德は、神々に移り神々はその得た功德を増大させ、人々へ別の功德を与えてくれるものと考えている。

カプラーラは僧侶と異なり妻帯しており、ゴイガマ出身者が多く世襲性をとっていることが多い。

神々は様々で、ヒンドゥー教に由来する神ではヴィジュタヤスカンダ、パッティニ女神、また仏教的な神ではナータやサマンなどがある。地域の神としてはヴィビシャナ、アイヤナーヤカ、ダディムンダなどがある。これらの神々は、仏陀を頂点として、一種のパンテオンを形づくっており、四大守護神（高地シンハラのカンディではナータ、ヴィシュス、カタラガマ、パッティニ、西海岸の低地シンハラではナータの替わりにサマンかヴィビシャナが入る）一地域神一村神一悪霊という階層秩序を形成している。上層は浄、下層は不浄と見なされている。

悪 霊

神々の下には、様々な霊的存在、死霊（プレータ）、幽霊、悪霊が存在し、その代表は悪霊である。彼らは悪の象徴であり、人間を不幸におとしめたり、病気にさせたりすると信じられている。これらの悪霊によって病気や不幸に陥ったと判断された場合には、カッタディヤーという悪霊祓い師を呼んできてトウィル儀礼を行ってその障りを取り除く。スリランカ

では占いや呪いのできるものは少なくない。民間の占星術師や占い師もいれば神官、時には僧侶までがこうしたマジカルなことに関わることもある。しかしこの悪魔祓いの治療儀礼のできるものは限られた特殊な集団だけである。それは代々そうした知識を伝え、伝統的な職業としてきたベラワーという特殊なカースト集団である。彼らはその他星座の複雑な動きに精通した占星術師でもあり、また寺院の仏塔や、仏陀や神々の像を作ったり、仏陀の生涯やジャータカ物語の壁画を描く、絵師・仏師でもある。

シンハラ人の仏教的コスモロジーは仏陀を含めた実に様々な超自然的な存在から成っている。まずすべての存在の最高位に立つのは、仏陀である。しかし一般に人々は仏陀に対して現世利益を願うことはせず、仏陀は来世の問題のみに関わるとして、日々功德を積むことに努める。その下にはヒンドゥー教由来の神々や地方神などがいて、仏陀の法の力を助ける一方、人々の現世での願いを聞き届けることもする。また人々の不敬な行いに対しては災いをもって正義の力を発揮する。上位の存在である仏陀や神々に対して人々は寺院や神祠に祈りを捧げ、花や果物や香などの清浄な供物を捧げる。

ところがこうした人々の平和で清らかな生活を常におびやかす悪魔や悪霊〈ブレータ〉が存在する。こうした悪魔や悪霊が人間にとりついて病を引き起こす。こうした病に対して古代インドのアユルヴェーダ医術が民間医療として古くから伝わっている。それでも治らないと悪魔祓いの治療儀礼が行われる。

以上見てきたように、スリランカの仏教は仏陀を頂点とする經典仏教とピリット儀礼を伴った民衆仏教が併存し、さらに地域の神信仰や呪術を伴った悪霊信仰などの混淆形態の土着の宗教文化が存在し、それらは共に相互補完ないしは緊張関係を保ちながらスリランカの宗教文化を形づくって

いると考えられる。

参考文献

- (1) 片山一良『バリッタ (Paritta) 儀礼の歴史的背景—アッタカター文献を中心に—』（『駒澤大学仏教学部論集』第10号）昭和54年11月25日
- (2) 片山一良『バリッタ (Paritta) 儀礼—スリランカの事例—』（『宗教学論集』第9輯 駒澤大学宗教学研究會）昭和54年12月31日
- (3) 青木 保『コロomboの Paritta 儀礼—調査覚書—』（『年報人間科学』No. 1 大阪大学人間科科学部）1980年
- (4) 高橋 壮『シンハラ仏教徒の宗教生活の形態—とくに上座仏教とデーワレー信仰の関連を中心に—』（『東海仏教』第30輯）昭和60年6月
- (5) 青木 保『聖地スリランカ』日本放送出版協會 昭和60年8月20日
- (6) 前田恵学編『現代スリランカの上座仏教』山喜房仏書林 昭和61年2月25日
- (7) 杉本良男編『もっと知りたいスリランカ』弘文堂 昭和62年10月10日
- (8) 鈴木正崇『スリランカの宗教と社会』春秋社 平成8年2月28日
- (9) E. Waldschmidt, Das Paritta : Eine Magische Zeremonie der buddhistischen Priester auf Ceylon, 1934.
- (10) Bechert, H. Buddhismus Staat und Gesellschaft in den Landern des Theravada Buddhismus, Erster Band Alfred Metz-ner Verlag, Frankfurt, 1966
- (11) Waldschmidt, E. Das Paritta, in Von Ceylon bis Turfan, Vandenheck & Rueprecht, Gattingen, 1967
- (12) S. J. Tambiah, Buddhism and the Spirit Cults in North-east Thailand, Cambridge 1970
- (13) Gombrich. R. F. Precept and Practice, Clarendon Press, Oxford, 1971
- (14) Lily de Silve, Paritta : A historical and religious study of the Buddhist Ceremony for Peace and Prosperity in Sri Lanka (=Spolia Zwylyanica, Vol. 36 Part 1) National Museums, Sri Lanka, 1981

